

平安・鎌倉時代の 波多野と波多野氏

現在の秦野市という市名は、市域の多くが、歴史上で長く「波多野」と呼ばれていたことによるものです。この波多野の地に居住し、波多野の地名を名字とした一族がいました。彼らは平安時代からこの地に住み、公家の時代から武家の時代への移り変わりや源氏と平家という武家の二大勢力の争いの中で生き残り、鎌倉幕府で御家人として活動しました。この冊子では、そんな平安時代末期から鎌倉時代初期の波多野氏と、関連する事柄を紹介します。

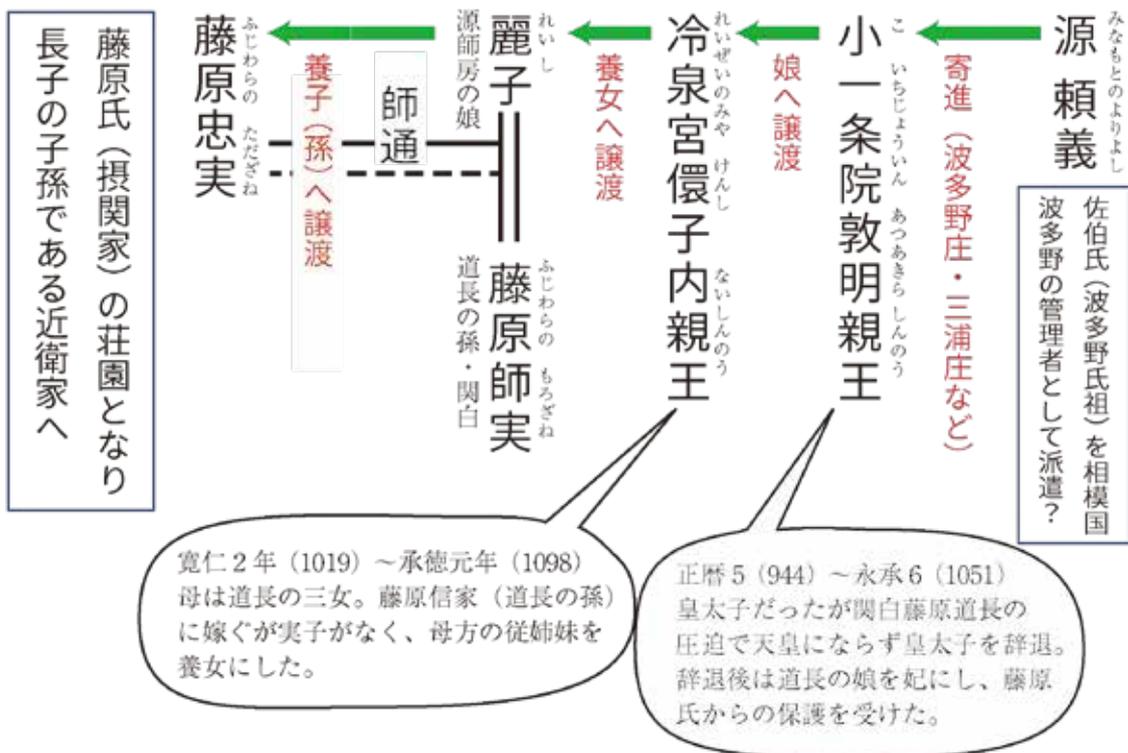
波多野庄について

私有地（荘園）として波多野の名が見られる最初の史料は、平安時代に書かれた『執政所抄』です。摂政・関白を務めた藤原忠実により元永元年（一一一八）から保安二年（一一二一）の間で作られたと推定されています。これ以後も、忠実の嫡流となる近衛家の所領目録で波多野の名が見られます。

波多野がなぜ近衛家の荘園になったのか、詳しいことはよくわかっていません。ですが、史料に残るいくつもの歴史事項をつなぎ合わせ、近衛家の荘園となるまでの波多野の伝来過程は推測されています。

平安時代は、公の所有物とされていた土地が荘園として私有が認められるようになった時代です。各地で土地を切り開き勢力を拡大した人々は、その土地を貴族などに寄進して荘園とすることで、公からの介入を受けずに土地を管理することができます。一方、寄進された貴族は、その土地に在住する人へ荘園の管理を任せることで、居住する京の周辺だけではなく離れた土地にある荘園を持つことができ、納入物も増えることとなります。このような仕組みが広がる時代に、波多野氏の祖である佐伯氏も、相模国にある波多野の地で勢力を広げるようになったと考えられます。

波多野庄伝来過程の推定（参考：湯山学『波多野氏と波多野庄』より）



平安時代く鎌倉前期の波多野氏

波多野氏は、源頼義に仕え前九年合戦で戦死した佐伯経範を祖としています。経範の詳しい履歴については系図によりさまざまな記述の違いがありますが、いづれにしても朝廷から東国の乱を治めるために派遣された源氏の軍に属していたようです。この経範の頃に相模国（神奈川県）の波多野に居住するようになり、その地名を名字として活動するようになったと考えられます。やがて一族は西相模を中心として分かれ、それぞれの地域に根付いて活動するようになりました。

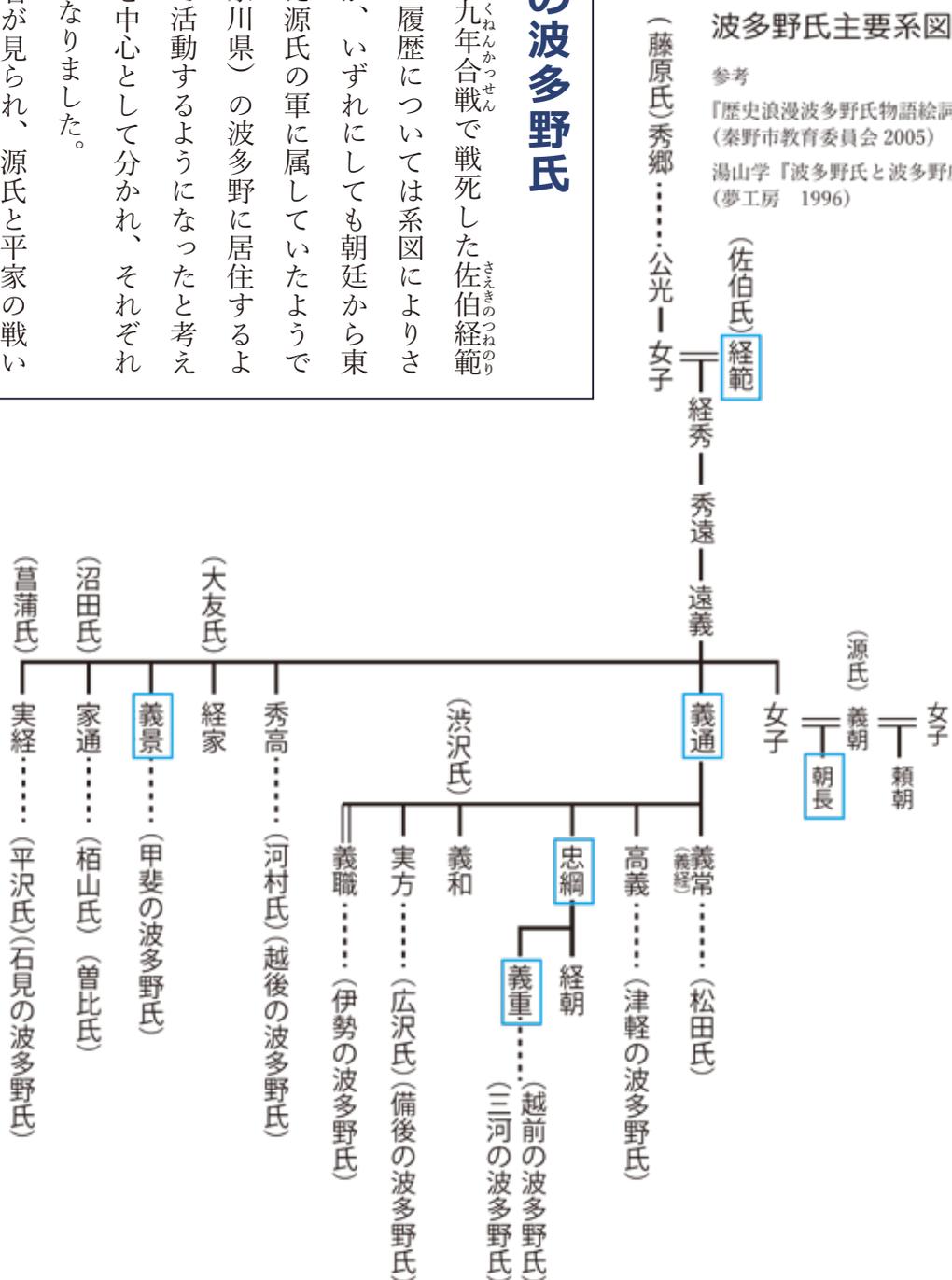
その後も軍記などの史料上に名が見られ、源氏と平家の戦いの末に、源頼義の子孫である頼朝が將軍として鎌倉を拠点に武家の政権を開くと、將軍の御家人として波多野氏の名が見られるようになります。

波多野氏主要系図

参考

『歴史浪漫波多野氏物語絵詞』
（秦野市教育委員会 2005）

湯山学『波多野氏と波多野庄』
（夢工房 1996）



□の人物は次ページからイメージイラストと一緒に解説します

前九年合戦で奮戦した波多野氏の祖
さえきのつねのり

佐伯経範

生年不詳〜一〇五七

波多野氏の祖とされる人物です。『尊卑分脈』では、藤原秀郷ふじわらのひでさとから五代後の公光の子とされ、母が佐伯氏さえきで、波多野の名字を名乗ったことを記しています。別の系図では、経範は佐伯氏の生まれで公光の娘を妻とし婿となって改姓したこと、父は相模国の目代もくだい（国司の代わりに現地へ派遣される人）だったとも記されています。前九年合戦ぜんくねんかっせんについて書かれた『陸奥話記』では、経範の属した源頼義の軍が黄海きのみの戦いで大苦戦し、経範は敵の囲みを突破したものの、主君の頼義が囲みを抜けられずにいると聞き、再び敵中に戻り戦死したことが書かれています。



頼朝の父と姻戚となり深い繋がりを築いた

波多野義通

一〇七〇〜一一六七

妹が源義朝よしもと（頼朝の父）の妻となり朝長を生んだことで源氏と外戚関係となります。保元元年（一一五六）、義通は義朝の軍として後白河天皇方につき、敵となった義朝の父である為義たみよしらと戦い勝利しました。『保元物語』では戦後の処罰として為義の幼い子四人の斬首を船岡山で行った悲劇が記されています。『吾妻鏡』では保元の乱後に義朝と不和となり相模へ帰ったと記されていますが、その後の平治の乱でも参戦したと記す資料もあります。不和の原因は、義朝が後継としたのが波多野氏の血を引く朝長ではなく頼朝にしたからといわれています。



波多野氏の血をひく源氏の御曹司

源朝長

一一四四〜一二六〇

源義朝の次男。母は波多野義通の妹で、朝長を通じて波多野氏は源氏との外戚関係を築きました。生まれ育った松田亭は後に頼朝が修理させて滞在したこともあり、広大な邸宅だったようです。朝廷での官位も得ていることは三浦氏の娘が生んだ義朝の長男である義平よしひらが無位無官だったことと対照的で、朝長には京での活動も期待されていたとも考えられています。平治の乱に敗れて父や兄弟と東国へ落ちる途中に落人狩りで受けた傷で動けなくなり、美濃国（岐阜県）青墓で自害しました。悲劇的な最期の逸話は能楽の演目「朝長」でも知られています。



鎌倉殿が頼朝の時代に波多野一族の中心だった

波多野義景

よしかけ

生没年未詳

義通の弟。文治四年（一一八八）に兄の義通から譲られた波多野本庄北方の所有権をめぐって頼朝の御前にて岡崎義実と論争し、頼朝の裁許により義景の勝訴となりました。翌五年（一一八九）の奥州への出陣で、自分の所領を幼い子へ譲ったことで戦場で討死する覚悟を示し、頼朝から賞賛されたことが『吾妻鏡』に記されています。兄の義通の子である義常が平家について頼朝に攻められ自殺したため、この時期は義景が波多野氏の中心的な立場だったようです。



北条氏とつながり、首塚や金剛寺の創建に関わった？

波多野忠綱

ただつな

生没年未詳

義通の次男。建久元年（一一九〇）の頼朝上洛に供奉するなど、この頃に義景とともに波多野氏を代表する一人となっていたようです。北条氏との繋がりが強かったようで、『吾妻鏡』では仁田忠常・畠山重忠・和田義盛といった北条氏の他氏排斥の時に名が記されています。和田合戦の後には先陣をめぐり三浦義村と將軍の御前裁許に臨みますが、義村を盲目となじった非で戦功が取り消しになりました。東田原にある実朝の首塚は実朝の三十三回忌にあたり忠綱が木造だった供養塔を石造に代えたと伝わり、首塚や金剛寺の創建にも関わったと考えられます。



片目を射られ奮戦、曹洞宗開祖の道元に帰依し支えた

波多野義重

よししげ

？～一二五八

忠綱の次男。北条重時（義時の三男）の娘を妻としています。承久三年（一二二二）の承久の乱の際には右目を矢で射られながらも反撃し、味方の士気を高めた勇猛ぶりが『吾妻鏡』に記されています。乱後は出雲守となり、六波羅評定衆として在京し、この期間で後の曹洞宗開祖となる道元と親交を深め援助するようになります。宇治にあった道元の寺が焼き討ちにあった際には越前国（福井県）にあった領地を寄進し、この地に道元が建てた寺が現在の永平寺に繋がります。永平寺の寺内には義重の像が祀られています。



⁵ あづまかがみ 『吾妻鏡』鎌倉幕府の歴史書。編者や成立年は未詳ですが、鎌倉時代末期に北条氏が深く関わって作られたと考えられています。

※人物イラストはイメージであり時代考証に基づいたイラストではありません。

その後の波多野氏

承久三年（一一二二）、西の朝廷と戦った承久の乱で勝利した幕府は、敗者となった人々が所有していた西国の領地を御家人たちに与え、それまで東国に居住していた御家人たちが西国へ領地を持ち移動する契機となりました。波多野氏もこの時期に西国などで得た領地で本拠を持つ人々がいました。波多野を名乗る一族の中では「出雲守」を継承する義重の子孫の活動が目立つようになります。史料上では、越前を本拠とする一族や京や伊勢など西国に本拠を置く波多野氏が南北朝期の戦いにも参戦したり、室町幕府の奉公衆として見られるなど、鎌倉時代以後の時代を生き抜いていきました。

主な参考書籍

- 秦野市『秦野市史 通史一 原始・古代・中世』（一九九〇年）
- 湯山学『波多野氏と波多野庄―興亡の歴史をたどる』（夢工房一九九六年）
- 湯山学『相模武士』全系譜とその史蹟 三 中村党・波多野党（戎光祥出版二〇一一年）
- 野口実『坂東武士団の成立と発展』（戎光祥出版二〇一三年）
- 関幸彦編『相模武士団』（吉川弘文館二〇一七年）

平安・鎌倉時代の波多野と波多野氏

令和4年11月3日

発行 / 秦野市生涯学習課文化財市史担当（はだの歴史博物館）

住所 / 神奈川県秦野市堀山下 380-3 電話 / 0463-87-5542

編集執筆 / 早田美智代 イラスト / 小林巧

関連年表

(参考 今野慶信「鎌倉御家人波多野氏について」2022年3月ミュージアムさくら塾配布資料より)

西暦	和暦	波多野氏・秦野地域のできごと
931～	承平年間	『倭名類聚鈔』余綾郡の中に「幡多」の名が見られる
1028	長元1	平忠常が反乱、源頼信が降服させる
1057	天喜5	佐伯経範 、前九年合戦で源頼義に従い参戦し討死
1136	保延2～ 久安5	波多野庄が冷泉院の忌日に素紙経を納める
1137	保延3	波多野 遠義 、子の 義通 に波多野本庄を譲る
1156	保元1	義通 、保元の乱で源義朝に従い源為朝・為義の軍と合戦
		源義朝の命により 義通 が舟岡山で為義の子4人を斬首する
		義通 が相模国へ下る
1159	平治1	義通 、平治の乱で源義朝の軍で戦う
1180	治承4	7月 義常 が伊豆で旗揚げをした頼朝からの挙兵の命を拒否する
		10月 義常 へ鎌倉に入った頼朝から追討令が出される。下川辺行平の到着前に 義常 は松田郷で自害
1181	養和元	忠綱 らが伊勢で平家方と戦う
1188	文治4	義景 が源頼朝の御前で岡崎義実と波多野本庄北方の所領につき争論する
1189	文治5	義景 らが頼朝の平泉攻めに（奥州合戦）に従う
1190	建久1	忠綱 ら、頼朝の上洛に従う
1192	建久3	義景 、鎌倉永福寺供養の導師の下向に足柄山で警固
1193	建久4	義景 ら、富士野の巻狩に参加
1195	建久6	義景 ・ 忠綱 ら、頼朝の上洛に従う
1199	正治1	忠綱 、梶原景時弾劾の連署状に加わる
1203	建仁3	忠綱 、比企氏の乱で、仁田忠常の弟五郎を討つ
1205	元久2	忠綱 、畠山重忠の追討に従う
1213	建保1	忠綱 、和田合戦で幕府方として戦う。和田方となった波多野氏は所領没収
1219	健保7	源実朝が公暁に暗殺され、武常晴が実朝の首を波多野に葬ったと伝わる
1221	承久3	波多野一族、承久の乱で幕府勢として上洛。 義重 らが活躍
1242	仁治3	義重 、京の六波羅亭で道元の法話を聴く
1244	寛元2	この頃、 義重 は北条重時の代官として在京 6月、 宣経 （ 義重 の子）、將軍頼嗣の甲冑の儀に伺候 7月、 義重 、越前国志比庄に寺を建立（後の永平寺）
1253	建長5	4月、 義重 、新日吉社の小五月会で流鏑馬役を勤める 10月、波多野庄が近衛家に請所として伝えられる

秦野に残る波多野氏の痕跡

3か所とも、神奈川中央交通バス「秦野駅」発「中庭」バス停下車
徒歩約五分



源実朝の首塚 東田原一〇一八

地元では「御首塚^{みしろしづか}」と呼ばれています。鎌倉幕府三代將軍の実朝は、建保七（一一一九）年に鶴岡八幡宮で甥の公^{こう} 暁^{あき}に殺されました。その首を持って逃げた公暁は追討されますが、『吾妻鏡』の記述によれば、実朝の首は見つからず胴体だけ鎌倉で葬られました。この実朝の首を三浦氏に属していた武常晴が発見し、この地に葬ったという話が金剛寺や地域で伝わる話です。その後、波多野忠綱が建長二年（一二五〇）に実朝の三十三回忌を執り行う際に、木像だった供養塔を石像に変えたとされています。この時に変えたとされる木造の五輪塔は、現在は鎌倉国宝館へ寄託されています。

田原ふるさと公園 東田原九九九

公園周辺は東田原中丸遺跡となっています。東田原中丸遺跡は、鎌倉時代の在地領主の館と推定される遺構や白かわらけなどの遺物が発見され、波多野氏との関連が注目されています。

大聖山金剛寺 東田原一一一六

鎌倉時代に武常晴が源実朝の首をこの地へ葬り、退耕行勇を招いて供養したことに始まるとされ、実朝三十三回忌の時に波多野忠綱が寺を再興したと伝えられています。寺内の木造阿弥陀三尊立像（市指定重要文化財）は実朝の念持仏と伝えられ、両脇侍の観音・勢至菩薩立像は、実朝の没後間もない頃に波多野氏らを中心に造立されたものと推定されています。